

環白神・岩木山ユネスコエコパークを考えるフォーラムに参加して

7月25日、市民団体津軽百年の森づくり主催の、「環白神・岩木山ユネスコエコパークを考える」フォーラムを拝聴させていただいた。

チラシには、白神山地が世界遺産になり30年を経過した機会に、自然・文化・産業・観光面での発展のためにユネスコエコパークへの登録について考えるとあり、内容は3名の専門家による基調講演と、その3名に関係自治体の3名を加えたディスカッションという2部構成。

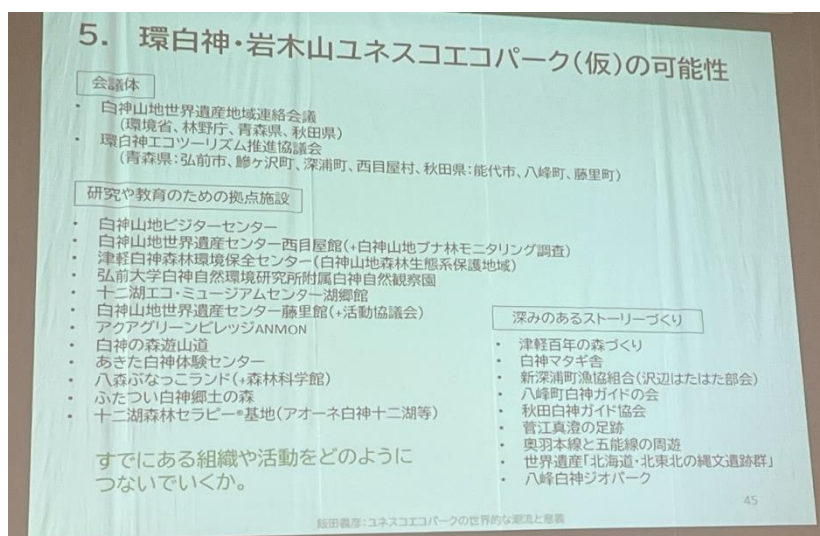
筑波大学名誉教授の吉田正人氏は、「『白神世界自然遺産』に至った経緯と残された課題」、という演題のもと、白神ではブナ原生林の自然価値が大きく注目され、ブナ帯文化など人と自然のつながりの価値が忘れられてしまった。世界自然遺産の周辺を広くユネスコエコパークにすることで、自然の恵みと人々の暮らしを結びつけることができるのではないか、などとお話しされた。

日本自然保護協会室長の若松信彦氏は、「ユネスコエコパークの国内外の事例（南アルプス BR）と運営」で、ユネスコエコパークの関係自治体は人口当たりの関係人口が多いこと、海外では134ヶ国に748地域があり地球の約5%を占めそこには2億6千万人以上が居住していること、南アルプスの事例から行政区域にとらわれない共通の自然環境による地域づくりができること、などを話された。

筑波大学准教授の飯田義彦氏は、「ユネスコエコパークの世界的な潮流と意義：環白神・岩木山 BR の可能性」で、白山の事例から、既に行われている地域活動に加え新たな活動を実践し、エリア内外への発信と横の交流による持続可能な地域づくりについて、などを話された。環白神という視点では、五能線と奥羽本線でぐるっと1周出来るという指摘が新鮮だ。

ユネスコエコパークのゾーニング制度では、①核心地域、②緩衝地域、③移行地域、3つの地域区分があるが、③移行地域、即ち「多様なアクターによる持続可能な社会経済活動や土地利用が促進される地域」での活動を通じ、地域が元気になることがキモだ。

署は津軽白神森林生態系保全センターとともに、世界自然遺産のソトにある十二湖周辺等で森林環境教育を実施しているが、文化的な視点も踏まえた内容にするなどバージョンアップしていきたい。



多様な拠点とアクター